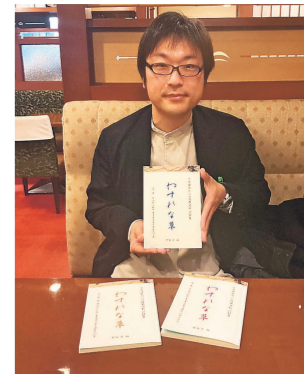


虹

そこから先を生きる



わすれな草を手にする野坂さん

⑬ 被災者の「心の復興過程」の記録

2011年3月11日午後2時46分。野坂真さん(37)＝富山市出身＝は商店街を歩いていた。現在は早稲田大の講師だが、当時はまだ大学院生。災害の研究のため、石川県輪島市の「朝市通り」にいた。2007年に起きた能登半島地震の影響を調べていた。足取りが軽かったからか、震度3の揺れに気付かなかった。風は冷たいが、空は晴れ。旅先のどこかのんびりとした空気の中にいた。

商店街の復興組合で聞き取りをしていると、視界の片隅で津波の映像を流すテレビがちらついた。東北で地震があったらしい。気になったが、「うるさいから消そう」と電源を切られてしまった。野坂さんは「洪水だな」とぼんやり思った。歴史に残る大災害だと分かったのは宿に戻ってからだった。

しばらくして宮城県石巻市を訪れた。大きな漁船が道路に横たわる。住宅街は跡形もない。支援物資が配られる駅前では怒号が飛び交う。現実とは思えない光景が広がっていた。「これが大災害だ」と思い知った。そして、能登半島地震と共に、東日本大震災が大切な研究テーマになった。

11年後。東日本大震災で家族を亡くした人たちの「その後」を聞き取りした記録集『わすれな草』を発売した。遺族に震災後の歩みを尋ね、「心の復興過程」を記したものだ。これまで第3集まで作った。毎回50部ずつ。東北の図書館にだけ配本する小さな薄い冊子だ。しかし、最愛の人を亡くし、今を生き抜く当事者の言葉は重い。

「大きな災害が起これば、全員助かるってことはないし、人は死ぬ。だからその後の出来事は残酷」「震災でもコロナでも、そういうことが起きたんだ、で終わるんじゃないって、そこから先を生きていかなきゃいけない」

詳細な分析を伴う論文とは異なり、生々しい言葉が積もる。野坂さんは「これはライフワーク。続けていきます」と言う。

◇

母方の祖父はシベリアの抑留兵だった。5年間も厳寒の地で自由を奪われた。富山に戻っても「アカ」のレッテルを貼られ、就職もできなかった。だからゼロから事業を起こした苦労人だ。祖父は当時の苦しみを野坂さんに明かすことはほとんどなかったが、夜中には悪夢でうなされていた。日本史の教科書なら1行で済まされる出来事ほんろうが、心も人生も大きくほんろう翻弄する。身近な存

在から感覚的に知った。

入学した金沢大学で歴史学を学ぼうとした。過酷な体験をした祖父の顔が頭にあった。しかし、歴史は広漠としている。特にくずし字で書かれた古文書を解読する技法には関心を持てなかった。代わりに興味が湧いたのが、社会学だ。社会の変化に目を向け、日常を問い直す学問だ。「一筋縄ではいかない現在の成り立ちが分かる気がした」。2年生になると、専門のコースを変えた。

その翌春、2007年の能登半島地震が起こった。石川県内の1人が死亡し、686軒も家が全壊した。当時は地震空白域とされていた場所での災害は鮮烈だった。過疎地域における災害復興を研究テーマに定めた。そのまま研究者になる覚悟を固めた。

◇

早稲田大学院に進んだ。そして東日本



「タンポポ」西淳

大震災が起きた。災害を研究する野坂さんは、毎月のように東北に通った。最も深く関わったのが、全町民の1割にあたる約1300人が犠牲になった岩手県大槌町だった。

「おめえんどこ何人だ」「3人だ」

あいさつのように帰らぬ家族の数を報告し合うほど被害が大きな地域だった。その町の復興事業の一環で、犠牲者の記録を残す「生きた証プロジェクト」に携わった。生前の歩みを遺族から聞き取り、災害の記憶を後世に語り継ぐ取り組みだ。

その事務局のスタッフが、妻となる大槌町出身の紀子さん(49)だった。野坂さんの12歳年上。当初は恋愛対象として、お互いを認識しなかった。しかし、ある日の飲み会の席で隣り合った。気が合った。

2017年8月15日に籍を入れた。終戦の日だ。覚えやすいことも理由だが、それだけではない。紀子さんは津波で祖母を亡くした。母の行方は分からない。父は病気で旅立ち、肉親は弟1人だけという境遇だった。「お盆なら家族全員に一度で会える」と考えた。

大槌町が位置する三陸沿岸部は明治にも、昭和にも大きな津波に見舞われた。しかし、災害の資料はあっても、遺族の心に向けた記録はほぼない。取り組んだ「生きた証プロジェクト」も犠牲者の記録であり、遺族は主役ではない。紀子さんは不思議に思っていた。「この土地の遺族はどう生きてきたんだろう」。素朴で痛切な疑問は、夫婦にとって『わすれな草』の出発点になった。

東日本大震災から時を経て、道路も建物も再建された。経済活動も戻った。それは目に見えて分かる。しかし、心は見えない。悲しみはいつ、どう癒えたのか。当事者の「心

ージごとに暗中模索の日々が刻まれた。

あの日、ある人は停電下でカセットコンロの炎で明かりをとった。病院の屋上で家族と連絡も取れずに救助を待った人もいた。家も仕事も失いながら、家族を探して駆け回る。体育館に並ぶ遺体や、その写真を恐る恐る見る。

悲しみに暮れながらも、新しい日常を生きようとする。ある女性は瓦礫の中で母の絵手紙を見つけて刺しゅうで再現した。別の女性は、津波で亡くなった父の生きがいだった理容店を建て直した。ある男性は引越す時に「頑張るな。耐えろ」と友人に送り出された。教訓としてまとめようとしないう飾らぬ言葉。その端々から、喪失感に襲われながらも、力を振り絞る姿勢がにじむ。

野坂さんは多くの被災者と出会ってきた。「頑張れと言われたくない」。よく耳にした言葉だ。限界まで頑張っているからだ。野坂さんは「これ以上どうしようもないんですよ。自分で言うのもおこがましいですが、10年以上被災地に通い続けてきたから共有できた土台がある。言葉の質感も文字に残せたと思います」と語る。

◇

東日本大震災の被災地からも災害の爪跡は消えていく。節目以外にメディアで取り上げられる機会は減った。しかし、人々の心の傷は閉じたり、開いたりを繰り返す。「社会が被災者に求める復興のレベルが高すぎませんか。深刻な経験をした人は常に弱いわけでも強わけでもない。揺らぐ心を持つ人間なんです。『わすれな草』を通じて災害に遭うということは、どういうことか。ありのまま感じてもらいたい」

2024年1月1日午後4時10分。最大震度7の能登半島地震が起こった。野坂さんにとっては研究者の原点がある場所だ。あの商店街は焼けた。立ち寄った神社の社殿はつぶれた。報道に触れるたびに目を見開く。

近々、現地に行く。研究者として何ができるか考える。「でも、まずは災害ボランティアからでしょうか」。ずっと通い続けると決めた。東北も、能登も。

『わすれな草』を読んでいると、最愛の人を亡くした遺族の方々が声を詰まらせたり、時には笑顔になったりしている様子が目に浮かびます。文字になった言葉の一つ一つに聞き手と話し手の血が通っています。野坂さんは最近、『わすれな草』の1～3集を富山県立図書館と石川県立図書館に寄贈したそうです。



「虹」第8巻 販売中

最新刊の第8巻「虹 誰もいないから両手を広げた」は、北日本新聞連載の141～160回目までの20話分を取っています。1,100円。問い合わせは北日本新聞社出版部、電話076(445)3352(平日午前9時～午後5時)。

心があたたまるエピソードや、この紙面についてのご意見、ご感想をお寄せください。

〒933-0911 高岡市あわら町13-50
北日本新聞社西部本社「虹」係
FAX 0766-25-7773
mail niji@kitanippon.jp
次回掲載は4月1日(月)です。

紙面提供/人と鉄のあいだに

OTANI 大谷製鉄株式会社

企画・制作/北日本新聞社
メディアビジネス局